

ジャグパル

JugPal



2003年7月1日 第20号



インタビュー

【くるくるシルクさん】

今回はサーカスアクトをベースとしてアーティスティックな創意工夫に溢れる作品で多くのファンを持つユニット「くるくるシルク」さんにインタビューしてきました。

はじめに

劇団「汎マイム工房」のスタジオPACの階段を上り3階に行くと主宰者であるあらい汎さんが笑顔で出迎えてくれました。



挨拶を交わしていると練習途中ですが、立川さん、高橋さん、そして藤居さんが次々とやって来ます。「この子ら口下手(くちべた)だけれどよろしく…」と3人をチラッと見回して汎さんは席を外されましたが、その時の汎さんのやや心配そうな(?)微笑みから、とても良い関係ができていなぁと感じました。

「くるくるシルク」が所属する「劇団汎マイム工房」は今年で27年目を迎え、多くのパフォーマーを排出し、パントマイムを演技のベースにクラウン芸、ダンス、喋りまで幅広い表現方法で多くの作品を創り出しています。

「くるくるシルク」は2000年に発足し、師でもあるあらい汎さん演出のもとに活動を続けています。現在メンバーは立川真也(たつかわしんや)さん、藤居克文(ふじいかつのり)さん、高橋徹(たかはしとおる)さんの3人ですが、前身である「シルク空」というユニットでは劇団員でもある金井圭介(かないけいすけ)さんをリーダーとして4人で活動していました。

ちなみに金井さんは1999年に文化庁在外研修生としてフランスの国立サーカス大学(CNAC)に入学、卒業後は日本と欧州の間を行き来しながら活動しています。

2002年3月にNHKで放映された「地球に好奇心:めざせ21世紀のサーカス」でこのCNACでの卒業公演に向けた金井さん等生徒たちの作品作りに取り組む様子が紹介され、ご覧になった方も多いかと思えます。

ヌーボーシルクとの出会い

3人は劇団でパントマイムを軸に、独自の新しい表現活動を模索していました。例えば立川さんは学生時代は油絵やオブジェなどの作品を制作していて、そういった現代アートに絡んだ身体表現ができないか可能性を探っていました。

そんな時近所にあった劇団汎マイム工房を偶然見つけて、研修生として稽古に参加、汎さんの舞台を観て「こんな芸術もあるのか!!」と感銘受けいつのまにか今日までのめり込んできました。ある時金井さんがヌーボーシルクの情報を知り、その頃一緒にコンビを組んでいた立川さん、藤居さん、そして高橋さんと、世界のヌーボーシルクと言われる人たちの作品のビデオを観る機会があり、サーカスにダンスや芝居やアートを織りまぜた作品に驚きを感じ、その後の1998年の来日公演「シルク・イシ」が、彼らを動かしました。

「衝撃を受けました。」そう語ってくれたように、確かに私にとっても深く印象に残る伝説的と言っても良いくらいの素晴らしい公演でした。

たった一人のパフォーマーと生バンドが創り出す「シルク・イシ」サーカスの舞台が、パフォーマーとしての彼らの心に「自分達にも何か出来る」と刻まれ、それからヌーボーシルクへの挑戦が始まったのです。

作品づくり（以下“くる”は、くるくるシルクさん）

安部：作品を創る時には客層を意識、つまりどのようなものが望まれているのか（ニーズ）を意識したりするのでしょうか。

くる：当初は自分たちの演（や）りたいことをやって、つまりそれまでに演られていなかったオリジナルなものを創っていくこと目標に、マイムで鍛えた肉体とサーカス道具を使って何が出来るかを意識していました。

今は広くいろいろな人たちに観てもらいたいし、観客の反応を反映していくようにしています。

安部：アイデアはどのようにして考えられますか。

くる：3人で思考錯誤しているものをあらい沓にぶつけ、アイデアの修正や特に演出面、演技面の指摘を受けております。

一人で考えたものを3人で話し合ったりと、それをまた沓と考えたりと、そういった面ではまったく自分では思いつかないアイデアも生まれてきます。

そういった感じでサーカススキルやマイムの肉体を使って3人で出来る遊びを探し、面白い動きやお互いの関係を見つけていきます。

稽古や本番の中でも、偶然起こる失敗や「おっ、そうくるっ！」とハプニング的な相手方の動きで生まれたりすることもあります。

それと舞台公演に関しては、例えばひとつの作品を創って3日間の公演で終了してしまうのはもったいなく残念です。

何日間か連続して公演して、観客の反応をうかがいながらレベルアップしていかないと作品としては完成しないと思っています。

せっかく創った作品を育てたいんです。

そういう意味で、箱根彫刻の森美術館の野外劇場では一日3回公演で2週間近く公演しますので、いろいろなことを試すことができるしとても勉強になりました。

練習について

安部：3人ともジャグリングが得意ですが、どのように練習していますか。

くる：3人ともはじめは不器用だったので、入団したての頃は先輩やプロの方々から教わりましたが、今は3人で海外のビデオを観たり互いに研究して練習しています。

種目によって好き嫌いがあるので、ひとつの種目をお互いのレベルが合うまで練習して習得するのは大変です。

今は表現の幅を広げるためにテシューの先生に来てもらって、日本ではあまり観ないサーカステクニックも特訓しています。

活動について

安部：2003年2月のフランスのカンパニーとのコラボレーション公演「星屑のヴォワイアージュ」を拝見しましたが、どこか一皮むけたような気がしましたが。

くる：フランス人アーティストはテクニックとしては上なので、自分たちが自分らしさを見せられるところは何かを突き詰めました。

その結果お互いのキャラクタがはっきりしたことが一因となっているのではないのでしょうか。

安部：そうですね、何回か観ている作品でも可笑しくて声を出して笑ってしまいました。



くる:最近、コントっぽくなってきたような気がするんです。サーカスじゃなくて。(笑)

安部:でも自分たちが演っていて気持ち良ければそれが一番ではないでしょうか。

さて、今後のご予定(抱負)をお教え下さい。

くる:エディンバラのような国際フェスティバルで公演したいですね。

今までは国内のイベント等で調整がつかなかったのですが、是非挑戦してみたいです。

そう言えば

安部:そう言えばくるくるシルクの公演の時は3人はいつも上半身裸のパンツ姿ですね。(笑)

くる:服を着ているとかえて演りにくいんです。

と言うのも身体で対話するというか、3人のお互いの身体が見えていた方が、お互いの意志疎通が図れて演りやすいんです。

そういったところはパントマイムに通ずるところがありますね。

おわりに

公演ではいつもモヒカン姿なので、怖い怖い兄さん方と思いきや、3人とも控えめの優しいお兄さん達でした。(もう3人共にお子さんがいらっしゃるんですって!)

3人共にパントマイムから入ったのですが、サーカスアクトやダンス、はたまた美術(オブジェ)といったものを融合して新しい舞台を築こうという真摯な姿勢がその語り口から感じられました。

また3人共にくるくるシルクのみならず、独立シクラウンとしての活動をしているので、それらの活動が相互に刺激し合って作品づくりのアイデアの源泉になっているようです。

もっともっとサーカスを広めたい、根付かせたい、彼らからそんな言葉を聞くと、サーカスファンのオジサンとしてはググッと胸にこみ上げてくるものがあります。

最後に簡単ですが今後の予定を紹介して、彼らへのエールに換えさせていただきます。

(問合せ:汎マイム工房 03-3993-9418)

道化博覧会おとこ

7月2日(水)19:00開演/中野ザ・ポケットにて

くるくるデジャブ～くるくるシルクVol.4～

7月4日(金)19:00開演,5日(土)19:00開演,6日(日)15:00開演/中野ザ・ポケットにて

オリンポスのMIMOS(ギリシャにて公演)

8月2日～8月14日

オリンポスのMIMOS(帰国報告公演)

10月15日～19日/両国シアター (カイ)にて

(参考)

・PACグループのWebサイト

<http://www.xes.co.jp/pac/>

・くるくるシルク応援ページ

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/lmamura5/>

(ヌーボーシルクとは)

新しい感性と方法論による、伝統的なサーカスの枠を打ち破る、アーティスティックな、創意工夫に溢れた作品がフランスを中心に1980年代以降出始め、その潮流をヌーボーシルク(新しいサーカス)と呼ぶ。

(エディンバラ・フェスティバルとは)

英国スコットランドで開催される欧州最大規模を誇る芸術祭。野心あふれる無名の大道芸人から世界一流の芸術家までが集い、街全体がフェスティバル熱で沸き立つ。

小劇場、映画、ジャズ、文芸祭も並行して開催される。

[安部 保範 <chansuke@chansuke.net>]



【東洋医学から見るジャグリングのすすめ(第11回)】

これまでの2回、あらゆる動作に係る反対側に意識を配る事の重要性を説明してきました。複合的な動作はもちろん、体の一部分しか使っていない様にみえる動作でも、実は全身の関節が微妙に協調し合っ、その動作が成り立っているのです。

下の図2は、「前々回は首肩の歪みについて」「前は腰の歪みについて」説明したものです。これまでは、首・肩と腰を別々に見ていきましたが、全身をよく観察するとAとD、BとCがそれぞれ同じ角度となり、対応している事が分かります。

つまり、この図の様に(右手で右足の下を通す技)右手を肩ごと下げる動作の場合、AとDはツッパリや引き伸ばされて起こる痛みが出やすく、BとCはコリと緊張による痛みが出やすくなっている訳です。

ジャグリングを含め人間の動作は、殆ど手を中心にするので、手首の痛みや首・肩の症状は、素人の目から見ても手の使い過ぎが原因なのではないか？と考えますが、手を使うと背中や腰、そして膝や足首までもが影響を受けます。

しかし、影響を受け症状が出る場所が、対角線上に出た場合は素人目には分かり難いので、何が原因か分からずに症状を抱え続けている方を多く見ます。

ですから、膝や足首、足底などの慢性的な痛みや、長い時間をかけて変形してしまっている関節痛などは、手・首・肩のバランスから調整しなければ根治になかなか繋がりません。

ジャグルポイント

1. 下半身(腰・股関節・膝・足首)の症状も上半身のバランスの崩れで起きやすいので、ジャグリングも下半身の片側に負担がかかる方は上半身のチェックが必要です。
2. 同じ技でも、出来やすい側と出来難い側があれば、胴体の歪み具合を肩のラインと腰(骨盤)のラインで鏡を見てチェックしましょう。
3. 出来るだけ左右の歪みをなくす努力をしましょう！
今回の図の様に、足の下に手を通す技であっても背骨の左右の可動は最小限にしましょう。

次回予告

上記の3. は次回考えていきます。

最初から、あまり歪みを作らずに足の下を通す事は出来ないのでしょうか？
背骨の可動は左右だけではありません。
仙腸関節や股関節の可動、そして正中線の意識も必要になってきそうですね！

次回もお楽しみに.....

[MOMONTA]

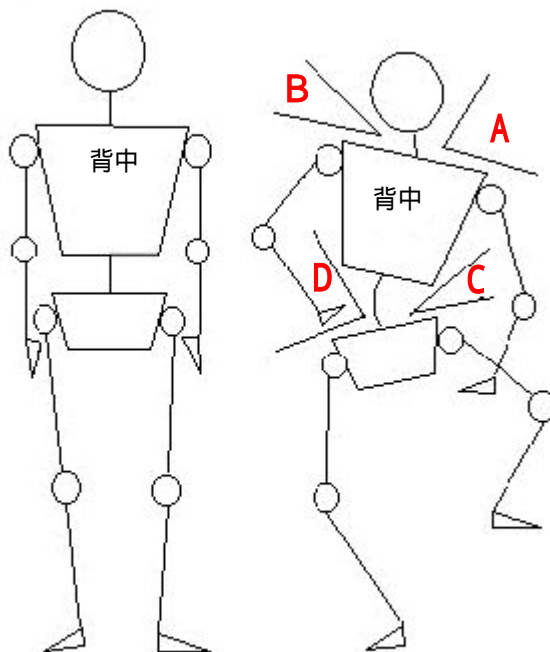


図1

図2



アート見物記

【アート見物記(4,5,6月分)】

第27回野毛大道芸

(4月19日・20日 横浜市野毛地区・みなとみらい121地区)

結構頑張ってたくさんのパフォーマーを観ました。

DAISUKE、福居一大・典実、王健・王輝、ホッチポッチ、アパッチ、カズホ、ペキーノフ・ファミリーサーカス、球斗、がーまるちよば、矢部亮、南芳高、Maschu。

ペキーノフは文字通り家族・親族による5人編成のファミリーサーカス団で、演者が少ない分飽きられないように一つ一つの演目がよく練られているし、演目と演目のつながりが良く、こういったサーカスも楽しいものです。

シルク・ドゥ・ソレイユばかりが究極のサーカスの代名詞のように扱われがちですが、サーカスってそんなに単純なものではないと感じさせる「サーカス」でした。

また今回の野毛は、初めて観る演者が多く、若いジャグラーが確実に育ってきているなぁと実感しました。

技術の面では格段の進歩を遂げていて本当に驚きです。

若い人が育っていくのを脇から見ているのは、結構楽しいものだとおジサンは久々に興奮しました。特に「ベンボスタ共和国」に1988年10歳の時に入団していたカズホさんの現在の成長した姿を見ると、久々に会った遠い親戚の子のような感じがして嬉しくなります。

コメディ・クラブ・ラウンジ

(6月1日 六本木ヒルズアリーナにて)

こりゃ文句なく面白かった。

シュニードレス(男性2人組)とフルハウス(男女2人組)が出演しました。

開店準備に追われるバーを舞台に、支配人ママと掃除夫と雇われパフォーマーが繰り出すドタバタ劇で、お洒落でスピーディなキレのある演技は久々にコメディを観たという感じです。

シュニードレスはひとつひとつの仕草や表情が可笑しく、フルハウスのジャグリングも見事ですが、二人の掛け合いも息がぴったりで、特にピアノの曲弾きは見事で、あっと言う間の1時間でした。

シャングリラ [公開リハーサル]

(6月6日 国立代々木競技場第一体育館にて)

1973年発売の荒井由美のアルバム「ひこうき雲」のことは良く覚えています。

当時大学生の私は、とても気に入って何回も何回も繰り返して聴いていました。

ご存じの通りそれ以来ユーミンは日本の音楽界の先頭を走り続けています。

熱烈なファンではないけれども、いつもユーミンの音楽はテレビやらのマスコミを通して何らか耳に入り続け、家には結構CDなんかもあったりして、いつも側にいるといった感じです。

ユーミンは私より一オ年上ですが、同じ年代でこれだけ凄い人がいると、全く面識がないにも関わらず、何故だか自慢たくなってしまう。

(知らない人であろうが、友人や会社の同僚、はたまた連れ合いのような身近な人でも、同じ世代で自分にとって誇れる人がたくさんいればいるほど、人生は豊かだと思う。)

そんなユーミンがサーカスを組み入れたコンサート「シャングリラ」を発表したのが1999年。

ユーミンとサーカスが結びつくなって、その時までは想像すらしませんでした。

全く関係が無く平行線のままであり続けると思っていた、2つの関心事がある日突然交わるなんてことはそう体験できることではなく、私にとって痛快そのものでした。

今回は前作よりもあらゆる面でスケールアップされ、舞台構成やら照明やら圧倒されっぱなしです。特に照明は会場全体をステージと一体化するがごとく、観客席をも多彩な照明が覆い尽くし「氷の惑星」という未知の世界の雰囲気をかもし出しています。

そう今回の設定は「氷の惑星」。

そこには巨大難破船、タイムマシン等が姿を現し、その中で超人的なサーカスアーティストが空中を舞い氷上を舞います。

演技に関しては、「技術的な高さではなく、美しさが重要(松任谷正隆)」という方針からか全体的にアクロバティックな動きが抑え気味のような気がしました。

また設定がはっきりしている分、夢の世界を謳う割にはリアリティ感がありすぎて、前作以上には夢の世界には浸れなかったというのが率直な感想です。

まあとにかくジャグリングを含めサーカスアクトは空中ブランコ、トランポリン、バンジー…何でも出てきてとにかく総ざらいといったところです。

もちろんどれひとつとっても十分に楽しめます。

氷上のジャグリングは、普段観るジャグリングとはひと味違って興味をそそられ、特に2人でスチールをしながらの氷上でのボールジャグリングは想像以上に美しく楽しいものです。

ところでユーミンもサーカスも大好きな私としては、このようなショーには戸惑ってしまうのです。

ユーミンの歌とサーカスを別々に扱って観てしまうのです。

つまりショーの中でもユーミンはユーミンとして、サーカスはサーカスとして切り出して別個に観てしまうので、ショーの後は混乱して燃焼しきれずモヤモヤが残りました。

以前からかなり多くのアーティストが、サーカスやマジックをコンサートの添え物的に使っていて、そういった類とは違い、確かにシャングリラのサーカスというアートと四つに組もうとしている姿勢は十分に伝わってきます。

だからこそそんな楽しみ方は損だと思うのですが、どうしてもサーカスのことが気になってしょうがない。

シャングリラ [二回目]

(6月8日 国立代々木競技場第一体育館にて)

ゲネプロとは違い、観客はノッていましたねえ。一方私は見方に少し余裕ができてきたようだ。

ダメじゃん小出ソロライブ:負け犬の遠吠え Vol.8

(6月13日 銀座小劇場にて)

もう8回目なんですね。

熱烈なファンも多いようで小出さんが出てくるだけで客席から笑い声が漏れます。

発想は相変わらず奇想天外で、台詞もよく考えられていて凄いわ。

喋りも相当上手くなってきていますが、噺家のような粘りとかしっとり感のある“語り”とは違って乾いた喋りなのですが、ネタがネタだけにかえてその方がさらりとして良いのかもしれない。

また背景のスクリーンに映像を映し出しての試みも前作同様面白いのですが、取り入れる時間的割合としてはそろそろ上限かと思います。

何故なら映像を取り入れたパフォーマンスは、マジックやコント等で良く見かけるようになりましたが、映像はあまりにもダイレクトすぎます。

小出さんのパフォーマンスは、あり得ないシチュエーションの設定の中でシリアスな社会的問題をいじくって、観客はそのギャップを楽しんでいます。

まさしく小出ワールド内でイメージーションをフルに駆使して観客は遊んでいます。

背景もなく使う道具も椅子だけ、ぬいぐるみだけ、あるいはかぶり物ひとつだけとか非常にシンプルで、それだからこそ何回観ても面白いのです。

(このライブを観たことのない人には理解不能でしょう。ごめんなさい。みんな観てね。)

今度は一体どんな世界に我々を引きずり込んでくれることやら……。

シャングリラ [三回目]

(6月21日 国立代々木競技場第一体育館にて)

3回目ともなると余裕が出てきたのか、「コンサートのような、サーカスのような、アイスショーのような世にも珍しいショー」とユーミン自身が語ってくれた、歌もサーカスもアイススケートも一緒に受け入れ、この珍しいショーを楽しむことができるようになりました。

9月公演ではもっと楽しむぞ！

[安部 保範 <chansuke@chansuke.net>]



お役立ち情報

【物欲番長: IC レコーダーのジャグラー的応用】

IC レコーダーってご存知でしょうか？

テープの代わりに半導体記憶装置を使う超小型の録音機です。

会議を録音して議事録をとったり、インタビューを録音して記事を起こしたりというのが主用途ですが、小型で軽いので胸ポケットなどに入れて持ち歩き、声のメモ帳として使う人も多いようです。

私も1年ほど前に購入し、仕事よりもジャグリング方面でいろいろ重宝しています。

IC レコーダーの特長

- (1) 小さく軽く目立たない
- (2) ボタン1つで、録音再生
- (3) 頭出しが簡単で速い
- (4) 繰り返し再生が容易
- (5) 高速再生ができる
- (6) 低速再生ができる
- (7) 音飛びが無い
- (8) PC とデータ交換が可能
- (9) 内容別に整理できる

IC レコーダーの欠点

もとが会議などの録音用なのでステレオではなく基本的にモノラルです。

また、人間の声の録音に最適化されており音楽を録音すると歪むことがあります。

ジャグラー的使い方のいろいろ

実際に使って役に立っている使い方(印)、「こういう使い方もあるのでは？」というアイデア(印)をご紹介します。タイトルの後の数字は前述の特長を示します。

[ネタ帳: -2]

ギャグや技のアイデアは、まず数をたくさん考えるのが大事。思いついたネタはその場で記録しないと消えてしまいます。

駅のホームでボソッと録音、「四面ショッカー(楚歌)」「宇宙刑事タリバン」。

あとで聞いて「何じゃコリヤ？」と自己嫌悪に陥ることもしばしばですが、まず考えること、記録することが大事。

[ワークショップ: -1,2]

体を動かしながらのワークショップでは、メモをとっても追いつかないしノートとペンが邪魔です。

要点を自分の言葉で要約し録音して、あとでメモを起こす方が簡単です。

といって、自分で考えて要約せずに講師の説明を録音するだけだと、かえって消化不良になります。

[練習時メモ: -1,2]

普段、練習をするときも、練習内容や気がついたコツを録音すると良いでしょう。日記をつけるのもよし。

[ダメ出し: -2]

他の人の演技を見て直すべき点を指摘する「ダメ出し」のとき、演技を見ながらポイントを録音していき、あとでまとめて伝えます。

[ビデオの目次: -2]

ジャグリングのビデオを見ながら、どこで誰がどんなことをしているかを感想とともに録音してメモに書き起こしておく。

次回見るときに便利です。

[曲名調べ: -1,2]

外出中やテレビを見ている時、気に入った曲を耳にしたらすぐ録音。曲名を人に尋ねるときに便利です。作曲できる人は、思いついたフレーズを鼻歌で録音するのもよいでしょう。

[外国語: -1,2,3,4,6,8]

まさに IC レコーダーの使い方の王道。

ジャグラーにとって英語などの外国語は重要です。英会話教材などを録音あるいはPCからダウンロードして持ち歩き、時間を見つけて聞いては練習します。聞き取れないところを何度も聞く「繰り返し再生」、遅くして聞き取る「低速再生」の便利さは、他に並ぶものがありません。

[練習のBGM: -1,2,3,4,6,7]

BGMにあわせたルーチンを練習するときも、ICレコーダーの特長は役立ちます。

機械部分がなく振動に強いので、身に付けて動き回ってもCDプレーヤーやMDプレーヤーのように音が飛びません。

つまづいているところにマークを打って何度も繰り返し練習できるし、再生スピードを遅くしてゆっくり練習することもできます。

動きの号令を一緒に吹き込んでおけば、振り付けを覚えるのにも役立ちます。

CD,MD より音質は落ちますが、我慢できる範囲です。

[効果音: -2]

自分ひとりだけで音響の担当の人がいない場合、任意のタイミングで効果音を入れるのはまず無理です。

「嵐のような拍手」や「アメリカのコメディ番組のような笑い声」を、好きなタイミングで入れてみたいと、かねがね考えているのですが果たせません。

ICレコーダーはボタン一押しで再生が始まり一件再生すると自動的に停まるので、効果音入れに使えるのではないかと思っています。

アンプ機材までケーブルを引っ張らなければならず、「ひも付き」になってしまうのが欠点ですが、そのうちやってみたい。

[朗読の練習: -2]

私は舌の回りが悪いので、絵本の朗読や早口言葉の練習のとき、たまに録音してチェックしています。

他にも、アイデア次第でいろいろな使い方ができると思います。

使い方のポイント

まず、陥りやすい罠の第一は「録音しただけで安心し、そのまま放っておく」ことです。

録音したものを聞くには、録音したのと同じ時間がかかることを忘れてはいけません。

録音した内容は、できるだけ早く文章に起こすか、不要なら消去しましょう。

さもないと大量のゴミの中に大事な録音が埋もれてしまいます。

また、大学の講義を録音しただけで安心して内職に励み、講義の録音はそのまま二度と聞かない、などというのは最悪のパターンです。

もう一つの罠は、「必要なときに手元にない」ことです。

この手の小道具は、「徹底的に使いこなす」か「しまいこんで埃をかぶらせる」のどちらかになりがちです。

どうせ買うなら、常に持ち歩き、枕元にも置くぐらいの覚悟をしましょう。

また、考えながらしゃべって録音するのはやめ、一度頭の中で考えを要約してから録音した方がよいです。

考えながら「あー、えーと」と言っている自分の声を聞くのは、思った以上に嫌なものです。

一言に要約してズバツと言えるように考える癖をつけましょう。

買うならば？

多くの会社がICレコーダーを発売しており、

半導体技術の進歩に伴って録音時間の長時間化、高機能化、低価格化が進んでいます。

モデルごとに機能が違い価格も大きく違いますので、できれば実際に手にとって、自分の目的に合った物を選びましょう。

安売り電器店なら安いものは1万円以下、高いものは3万円ぐらいします。

最近の新製品には、ステレオ録音・再生ができたり、MP3プレーヤー同様に音楽鑑賞にも使えたりするものが出てきたようです(ただし、録音時間は短くなる)。

新聞記者のように大量に録音するのでなければ、最近は低価格品でも十分な録音時間があります。

あまりたくさん録音できても聞くのが面倒になるのがおちですから、録音時間にはこだわらなくて良いと私は考えます。

小さく軽いもの、多機能なものに目が行きがちですが、スピーカーやボタンの操作性もけっこう重要です。

PCとの接続、可変速再生などは、価格との兼ね合いで考えどころですが、できれば欲しい機能でしょう。

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]



お知らせ (J J F 2 0 0 3)

【Japan Juggling Festival 2003】



あなたに会いたい、ジャグっちゃ仙台。
「ジャパンジャグリングフェスティバル2003」に行きましょう！

ジャグリングって何だ？と思っている人も、ジャグリングって素敵だ！と見ている人も、もちろんジャグリングが好きでたまらないコアなの皆さんも、お待ちかね日本ジャグリング協会が主催する日本最大のジャグリングイベント「ジャパンジャグリングフェスティバル」(以下、JJF)の季節が今年もやってきます。2003年の開催地は杜の都・仙台。暑い夏の思い出になるであろうJJF2003の魅力をここでみなさんに紹介しましょう。

どうして「仙台」で開催なの？

JJFは1999年より毎年開催地を変えて開催されてきました。

ジャグリングという言葉がまだ広く知られていない頃、府中の森で開催された記念すべき第1回目から早くも5年の歳月が過ぎ今日ではテレビやいろいろなメディア、ショービジネスなどでジャグリングは我々を楽しませてくれています。

そこで次期JJF開催地の候補にあがったのが「仙台市」。

初めての東北地方での開催です。ジャグラー人口が少ないと言われる「みちのく・仙台」にどれだけのジャグラーが集まるのでしょうか。それは新しい挑戦なのです。

今年のJJFは何かが違う！

今年は地方都市開催という事でジャグリングの普及にさらに力を入れています。

多くの人にジャグリングの楽しさを知ってもらいたい！仙台にジャグリングの風をふかせたい！その気持ちが仙台から全国の多くの方々へ伝わればと思っています。

去る3月から3ヶ月連続で仙台市内でプレ企画を開催。ジャグリングのパフォーマンスにより多くの市民へ日本大会の仙台開催をアピールしてきました。

一体誰が運営してるんだ？

JJFの運営のため例年同様、日本ジャグリング協会会員のボランティアによる実行委員会が結成されています。

仙台在住の実行委員長 本郷仁一をはじめ関東中部関西などから13名(6月15日現在)の精鋭により日夜活発な会議が繰り広げられています。

また、現地で運営をサポートする現地スタッフも仙台市内から11名集まりました。

さらに、仙台の市民活動NPO団体、その他関係企業・団体などがJJFのために力を貸してくれています。

壮大なプロジェクトによって、JJF2003仙台大会が今、開催されようとしているのです。

ゲストステージはヤングでHOT！

今年のゲストステージは、仙台では2度と見れないであろう若いながらも超一流のテクニックを持つ世界トップジャグラー達によるステージが実現します。

ロシアからはヴォヴァとオルガのガルチェンコ兄妹が初来日。

そして迎え撃つ日本勢は世界ジュニアチャンピオンでお馴染み、地元・仙台の矢部亮。

さらに、デビルスティックの技術とコミカルなパフォーマンスで評判のハードパンチャーしんのすけが進行します。これは超必見間違いなし。

まだまだ紹介しきれない話題満載のJJF2003仙台大会。

もちろんチャンピオンシップでは過去を超えるハイレベルな選手権に期待が高まります。

ここで紹介できないその全貌は是非あなたの目で確かめてください。

みなさまのご参加を心からお待ちしています。

あなたも仙台と一緒にジャグリングを見てやって楽しみましょう。

【Japan Juggling Festival 2003 in SENDAI】

メイン会場

開催日:2003年8月22日(金)~24日(日)

会場:泉体育館(宮城県仙台市泉区・泉総合運動場内)

開催内容:種目別発表会/ワークショップ/フリーパフォーマンス/ゲーム/販売ブース他

参加費:(全日程)大人7,000円・18歳以下3,000円

ゲストステージ “Young & Talented”

開催日:2003年8月23日(土)18:00開場/18:30開演

会場:仙台市青年文化センター交流ホール(宮城県仙台市青葉区旭ヶ丘)

出演:ヴォヴァ&オルガ・ガルチェンコ兄弟、矢部亮、ハードパンチャーしんのすけ

チケット料金:(前売り)2,000円(当日)2,300円

参加申し込み、チケットの購入方法については、
日本ジャグリング協会ホームページをご覧ください。
<http://www.juggling.jp>

[実行委員長:本郷 仁一 <hongo@juggling.jp>]



会場となる泉体育館

編集後記

しかし暑いですねえ・・・こう暑いとしばらくは屋外ではなく、屋内のパフォーマンスを楽しまざるを得ないですな。

インターネットでのチケット購入というのは便利で、ついつい興味ある公演には全てクリックしたくなってしまいますが、当然お金と時間のことを考えなくてはいけないので、便利すぎるのも要注意。

ちなみに現在ゲットしたチケットは以下の通りで、これらだけではなく今夏もいろいろなパフォーマンスを楽しむぞ！

- ・ブラスト(7月26日Bunkamuraオーチャードホール)
<http://eee.eplus.co.jp/s/blast/>
- ・ビーシャ・ビーシャ(8月9日赤坂ACTシアター)
<http://eee.eplus.co.jp/s/villa/>
- ・レニングラード国立舞台サーカス(8月23日よこすか劇場)
- ・シャングリラ (9月13日横浜マリーナ)
<http://eee.eplus.co.jp/s/shangrila2/>
- ・リバーダンス(11月8日東京国際フォーラム)
<http://eee.eplus.co.jp/s/rd/>

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行していて、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人には一切関係しているものではありません。

ジャグパルはWeb上でも見られますので、紙での郵送が不必要な方はご連絡ください。
WebサイトJugPal:<<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

編集発行人:安部保範

住所:横浜市栄区公田町424-9 (〒247-0014)

見世物広場:<http://www.chansuke.net>

E-mail:chansuke@chansuke.net